



強制絶頂

連続孕ませ・出産

拡張・子宮脱

魔族に墮とされた聖女姉妹

～呪いで聖なる力を繁殖の力へ歪められた修道女姉妹～

基本CG17枚
総枚数678枚

NTR要素・淫紋・ポテ腹あり

巨人・触手姦

人間と魔物たちが戦争を始め、鎬を削っていた時代……
その中でも、わずかに戦乱を免れた国があった。

女神アルテリアに愛されたというこの小国もその二つで、
強い結界で外部の魔物を寄せ付けないとされている。

その為、女神を崇める宗教が盛んで、
その中でも強い信仰心で特別な回復魔法の加護を得た
癒やしの圣女と呼ばれる修道女たちは、
医者が少ないこの国でも重宝されていた。



「それじゃ行ってくるわ、留守を頼むわね。アルド。」

「村長さんがお世話に来てくれますから、ちゃんと言う事を聞くんですよ。」

「うん、わかった...。」

この2人は、孤児の僕を引き取って育ててくれた姉妹のシスター、エミリアとミルカだ。

この村の教会を2人で運営している。

遠くの村々で出た病人や怪我人を癒やすため、二人は巡回へ旅立つところだ。

聖女としての務めに奔走する生活の中、優しく、弟のように育ててくれた2人へ、僕は親以上の特別な感情を抱いていた。

プリン

おで

おで



「エ、エミリアお姉ちゃん、ミルカ…。
やっぱ、行かないでよぉ…！
何だか、嫌な予感があるんだ…！」

「もう…！
アルドは甘えん坊ね。
そんなに私達と
離れたくないの？」

「優しい子ですから、
心配してくれているんですよ。」

大丈夫ですよ、今回は少し長いですが
それでも半年ほどで
帰ってこれるでしょうから。」

「めんなさいわ…」

うん…

ぐず…

魔物が出ず、野盗もないこの国では
女の子二人の旅もそれほど危ないものじゃなかった。
第一、苦しんでいる人たちをこのふたりが放っておけるわけない。
でも…。
二人は僕を慰め、強く抱きしめてから旅立っていった。

まさか、あの子の予感が的中するなんて…
巡回先の村は荒れ果てて、住人は残っておらず、
私達はそこにいた魔物の群れに囲まれました…。



「よく来たな！
聖女さんがた、
歓迎するぜ！」

「な、なんで……？
魔物がこんなに……！」

「へへへ、こりゃあ相当の当たりだぜ。
さっさとやつちまいでえな。」

「バカ、魔神様の面通しが
済んでからだろうが！」

「この国には、結界で魔物が入ってこれないはず……
なのに……？」



「そう…こやつらは我が封印から目覚めた時に、手下として創り出したのだ。」
「あなたは…!?」

それは見たこともない、禍々しい魔物…というより、
段違いに大きな魔力を持った、邪神…でした。

「忌々しい女神にこの地へ封印され、幾星霜…
櫛を外す為に魔力を使いすぎた…」

我には…分身を生み出す女が必要なのだ。
それも、そなたたちのような特別な聖女がな…。」

まさか、国の外ではなく内部にこんな恐ろしい存在がいたなんて…

「ま、待つてください！
妹は、ミルカは逃がして…
私の身体なら、捧げます、から…!!」

「お、お姉ちゃん…!!」

元より戦う力も意思も持たない私は、
ただ許しを請うより他にありません…。

ムン

ズ--

ズズ!!

「ならば、そうだな...。
まずは、腹を見せてみる。」

「お、お腹...!?」

「なんでよお...!?」

「いいから
さっさと
その腹出しやがれ！
襲っちゃうぞ！」

「襲っちゃうぞ！」

私達は、仕方なく言う通りにします...

「これだ...この力...」

触手が、下腹部へと伸びてきて...





「ひいっ！」

お腹の、奥…
内臓が、一瞬まるで熱湯のように
熱くなりました…

「な、何よ!?
あたしたちに
何したの!?!」

「呪いだ…
聖女之力を反転させる呪い…」

ビッ
ッ

ビッ
ッ

ズ
ズ

ズ
ズ

「へへへ：
ボルガルア様、そこそこ
こいつら連れてっていいですかい？」

「うむ。
二人のどちらかを我的伴侶とする。
ふさわしい身体となるようにせいぜい耕しておけ。」

その為の呪いは刻んでおいた。
頼んだぞ、オークども。」

「へへっ！任せてくださいよ！」

「そんな！やめて！
ミルカは見逃してください！」

私の懇願もむなしく、ふたりとも廃村の荒れ果てた家屋へ
連れて行かれました…。



「ああん？
さつきは妹の代わりになるだの
立派な事言うてた割に
この手は何だよ？」

「ま、待つてください！...！
せめて、その...
心の準備を...！」
フク...！

苦しむ人を助けて、
感謝される...！
私には善意の中で生きてきた

ス...

ヤレッ

アッ



「グヘヘ！
未経験の聖女ま○こ
だもんなあ？
俺のこのデカいブツを
突っ込まれるのが
怖いんだろ？」

「い、言わないで
ください……！」

「このような悪意を
向けられる事に、
慣れていませんでした……」

「ググ！」

「ッ……」

「グッ」



オークは、
私の股へは、
その太いものを
擦り付けたいです...

「おお、しっかり
これが処女膜の
感触かあ？
今のうちにさよなら
しとけよ？」

うわぁぁぁ！

ズリ

ズリ

ム...



オークは私の非力な抵抗など
ものともせず、
その男性器をねじこんで
きました…!!

ん
ぢぢぢぢ!!

「つひひ、
初物いただき…」

メッ
メッ

メッ

胸を二つに裂かれるような
鋭い痛みと、内臓を圧迫される
苦しみが同時に押し寄せてきました…。



「いい加減無駄な抵抗
やめやがれ！
その分妹が
苦しむだけだぜ！」

「うう...
わ、わかりました...」

腕をどかすと、魔物は
私の内臓を殴りつけるように
腰の動きを早めます...

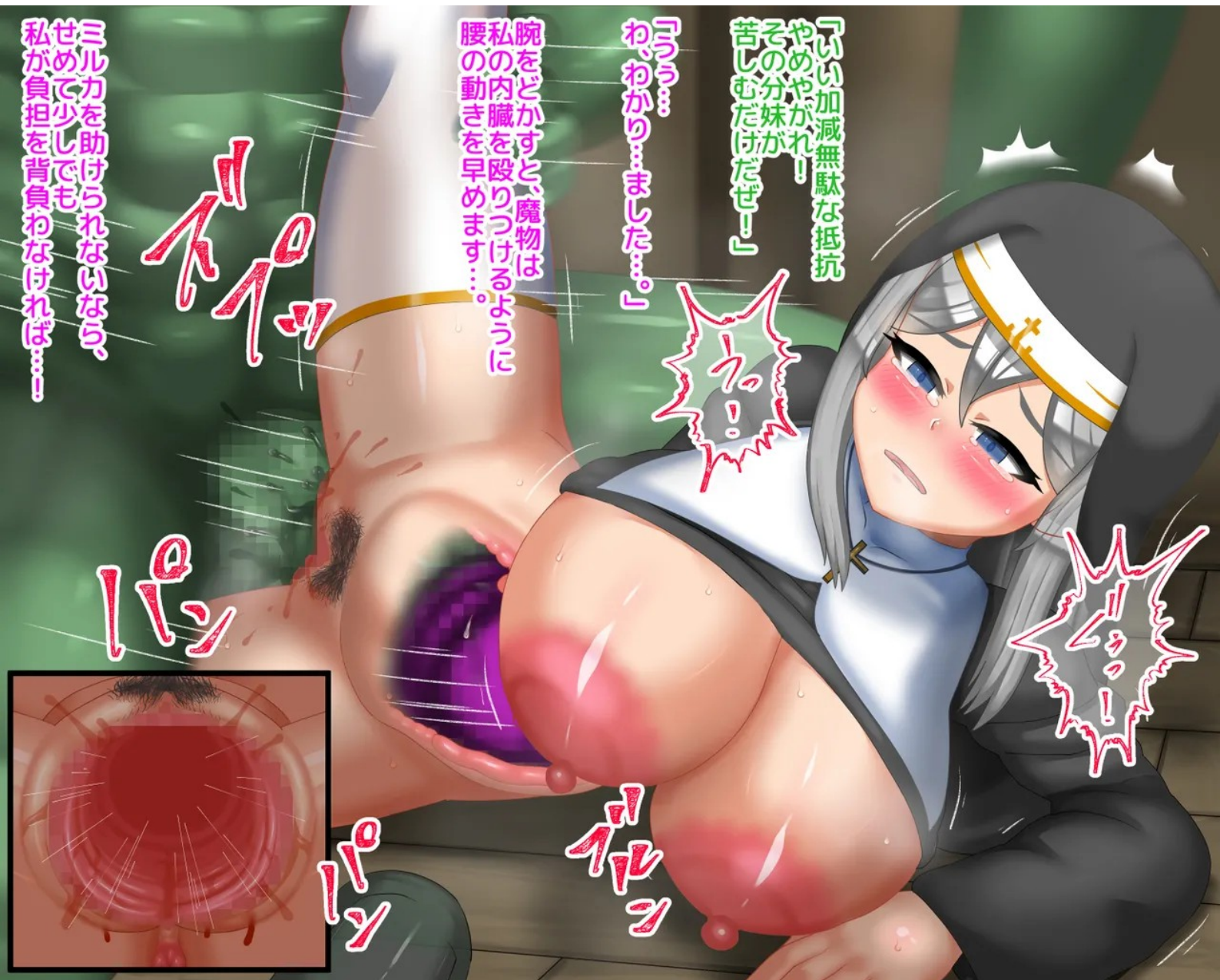
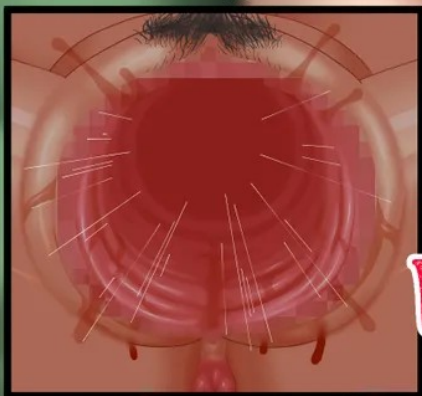
ミル力を助けられないなら、
せめて少しでも
私が負担を背負わなければ...！

ドッ
ッ
ッ

パン

パン

ゴ
ッ
ッ





「へへ、腹が膨れる
くらい出してやうたぜ。
いきなり孕んじまった
かもある？
聖女さまよお？」

「うぐうっ……！
か、神よ……！
おゆるしください……！」

ミルカも、
こんな恐ろしい事を
されているのでしょうか……。
無力な姉で、
ごめんなさい……！

ドペイ……

ヒッ……

ガッ……

ド……



「フヘヘ...
聖女さまのま〇こは
小便臭えぜ。」

「むぐぐ...
薄汚い口を離さないよ、
この変態オーク！」

「なんだよ？
やけに元気だなこいつ？」

あたしは縛られて、
頭を踏まれながら、
乱暴されたわ...

本当は、怖くて...
おしっこ...
漏らしそうだったけど...

ググ...

ハッ
ハッ
ハッ

ん...!

ぢわ...



「ああ？
せうかく入れやすく
濡らしてやっでんのに！
いきなり突っ込んでやるうか！？」

「やれるもんなら
やっでみなさいよ！
この変態！」

「あんたたち下衆に
屈したりしないから！」

「だそつだ。
やっでやんな。」

変態！！

「あたしだって、
守られたいだけ、
アナルだって慕っ
てくれない！
聖女なんだから！
毅然として立ち向
かってやる！」

ガァ

ガァ

ガァ
ガァ

ガァ

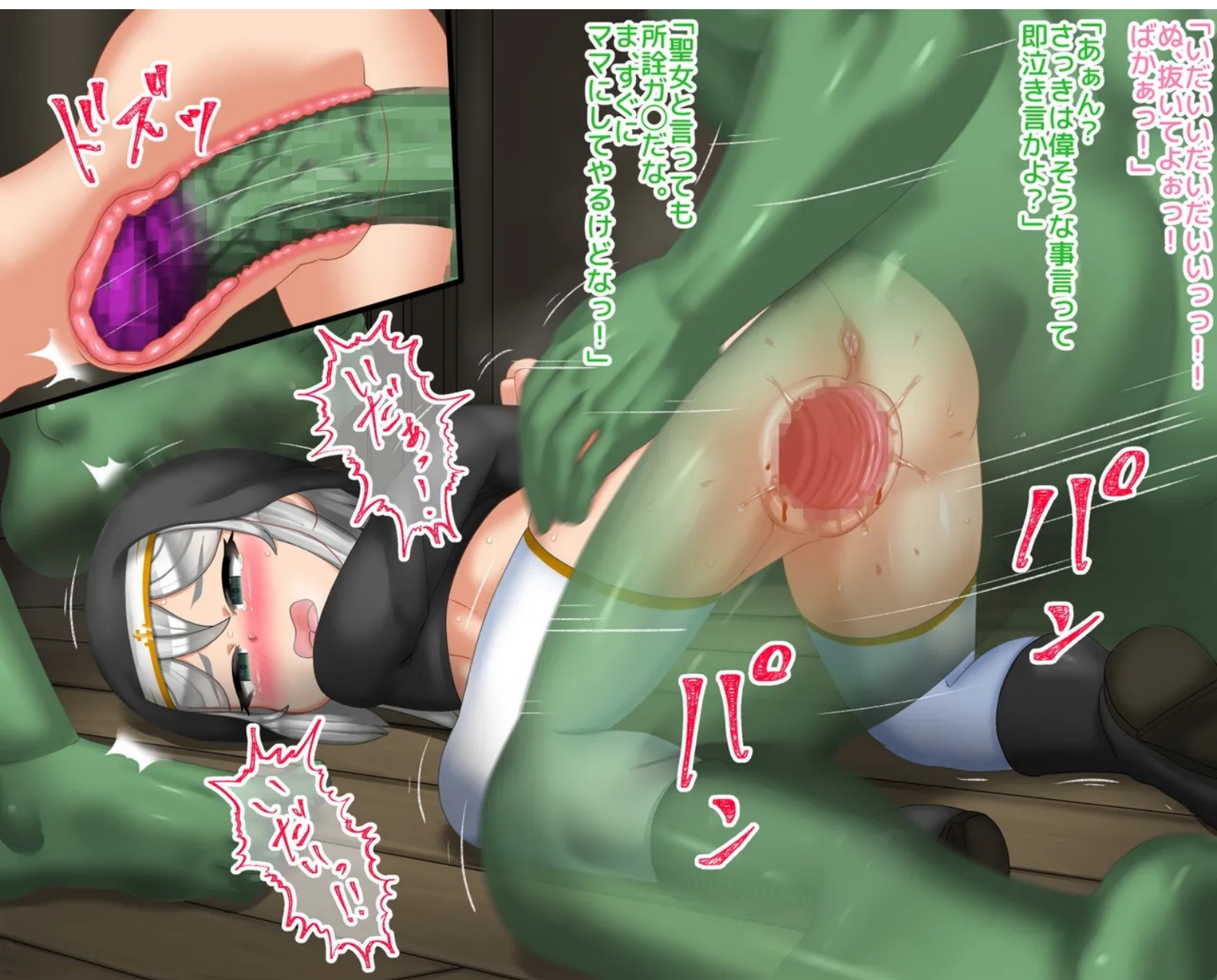
「へへ、そんな
言葉に甘えて……」

それはそんな気持ちが一瞬で吹っ飛ばすような、恐ろしい痛みだった……

「いや、それでも処女膜ブチ破る感触は最高だわ！ガハハ！」



「聖女と言っても
所詮ガ○だな。
まですぐに
ママにしてやるけどなっ！」



「うわあああつー!!
抜けっ!!
ぬいてよあつー!!
中に、ださないでえつー!!」

「へへ、わりいな。
もう出ちまったよ。」

トビュッ

ウわわわわ!!



「うっははあっ！
聖女さまはケツも
極上の穴してやがるぜ！
褌が吸い付いてきやがる！」

オークたちは、代わる代わる私を犯すうちに、
不浄の穴にまでも挿入し始めました！

「ちっ！
まだ終わんねえのか？
もう待てねえぞ！」

ひゃー！！

ガッ
ボッ
ッ

ガッ
ボッ
ッ

ガッ
ボッ
ッ



「もっこのうちでいいか！
無駄にでけえ乳で
抜かせてもらっぜ！」

彼らはまるで
性欲の化身のように……
私の全身を性玩具として
弄びます……



「やべえ！
もう出ちまうー」

「俺もだ！
ケツの中にくれてやるぜー」

私達は、
敬虔な信徒であるとして
努力してきたはず……

神よ、これは試練なのではないか？



女神さまを疑うなかと、
ミルカやアルドへ教え込んできた私が、
今、何を...？

熱い精液を腸内と乳房へ
注がれ、激しい恥辱と苦痛の中で
私の思考はだんだんと
ぼやけていきました...

ガビュッ

ああ！

ガッ

ビュッ
ビュッ
ビュッ

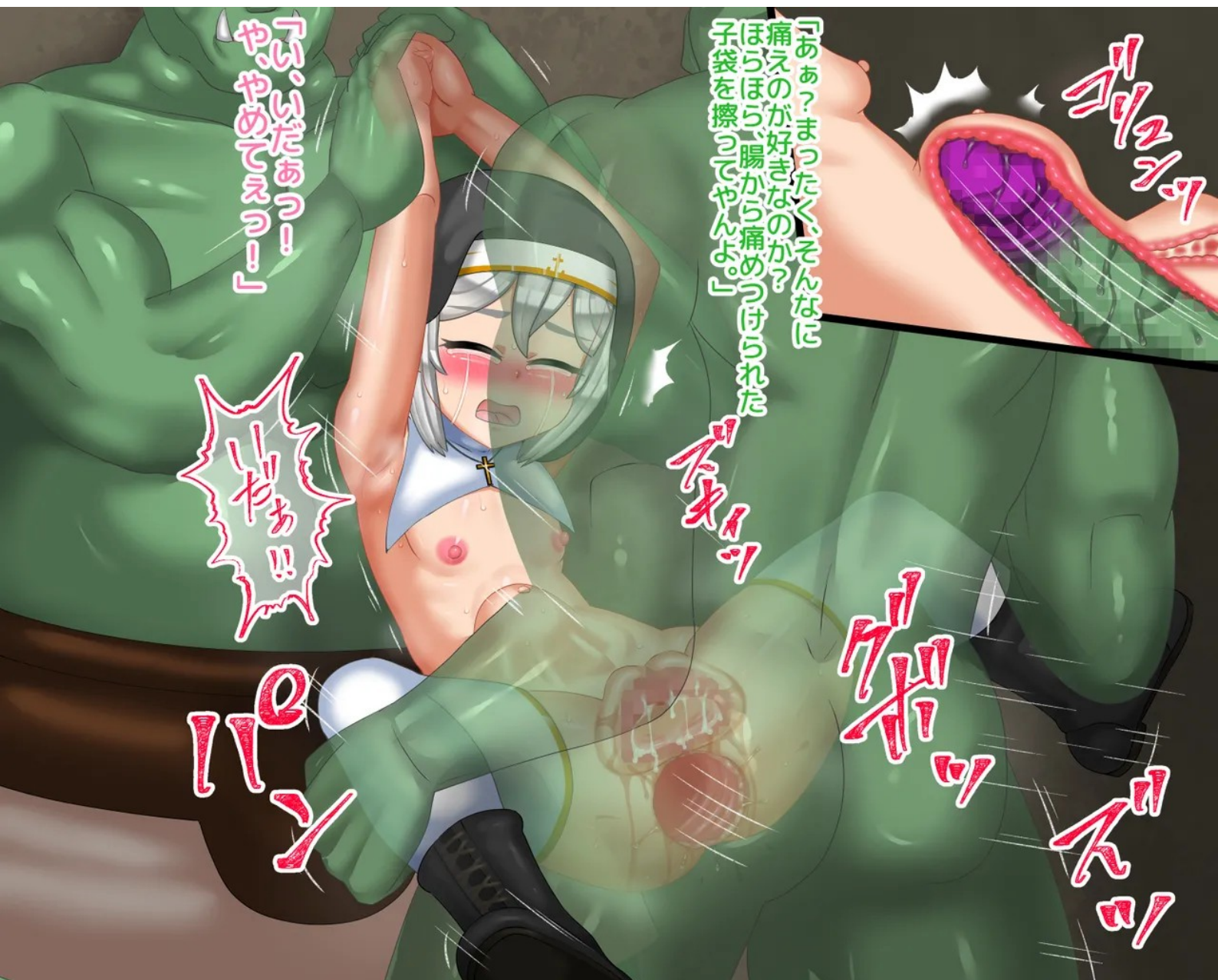
ハッ



「態度は最悪だがケツは素直だな！
すんなり入るじゃねえかーギヤハハ！」

「くう……！
地獄に、落ちる……！」







「やめてください、
だろ？なあ？」

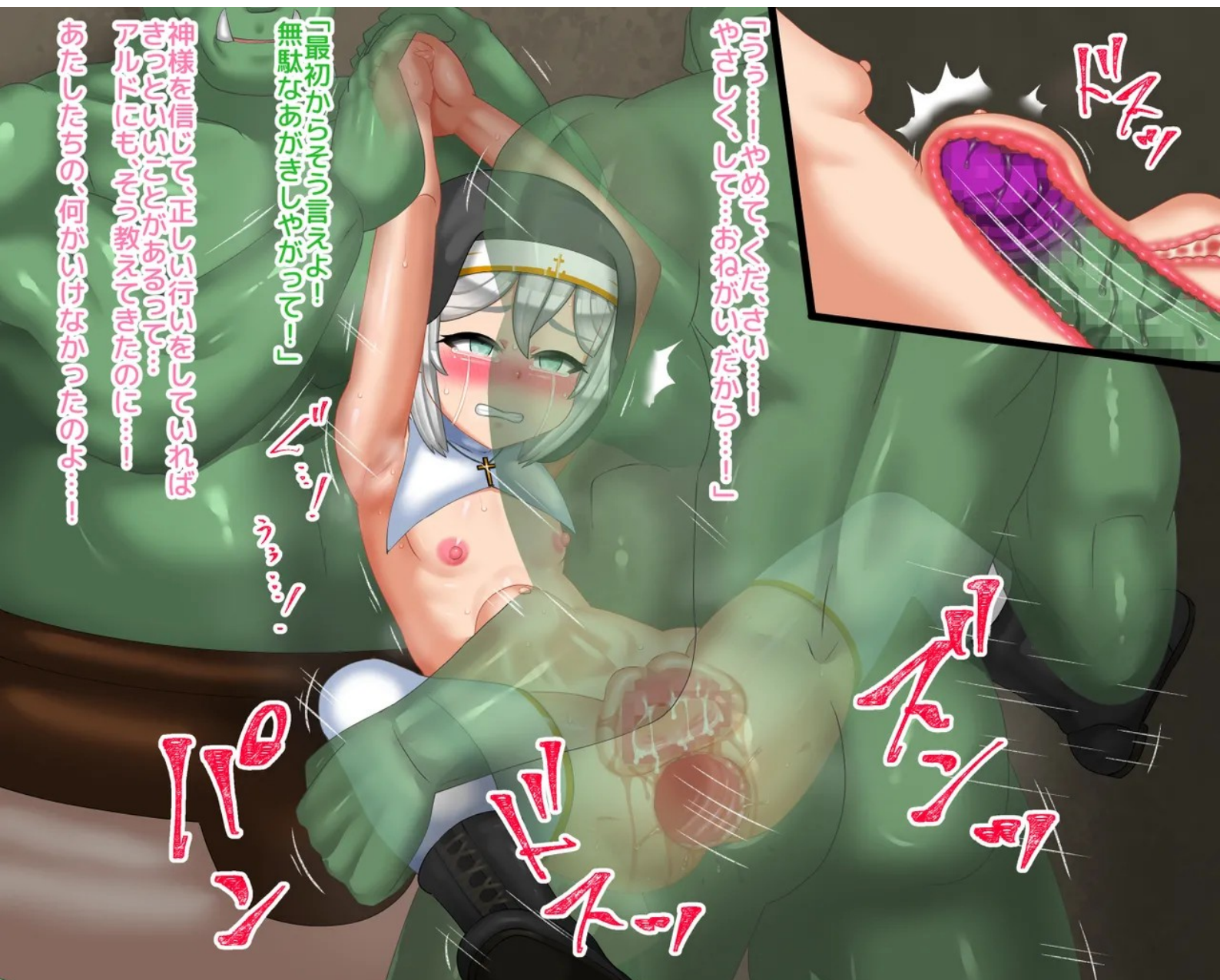
こいつら……！
こんな腕力しか取り柄のないやつらに、
なんで蹂躪されないといけないの……！

グッ！

ドッ！

ドッ！

グッ！



「うう……やめてください……
やさしくして……おねがいだから……」

「最初からそう言えよ！
無駄なあがきしやがって！」

神様を信じて、正しい行いをしていれば
きつといいことがあるって……
アルドにも、そう教えてきたのに……
あたしたちの、何がいけなかったのよ……



「へへ、きったねえな。やりすぎだろ。」

はー…

ひゅー…

「何しろそこらの村娘とは違う
聖女の姉妹だぜ？」

「チ○ポにも気合が入るってもんよ。」

「ガハハ！ちげえねえ！」

オーク達に散々に犯され、
そのまま床に転がされた
私達は、耐えきれないほどの
屈辱と苦痛の中…

一瞬、心に女神様を疑う心が芽生えました。

ハロ---

ガッ

ガッ

「どうして…？
神よ、私たちが…何をしだと言ったのですか…？」

せー…

せー…





「何が神様よ……！
なんの助けにもならないじゃない……！」

は……
え……

そいんな私たちのお腹へ、
呪いの紋章が一つ、
光りながら現れました……。

ズズズ……

「お！見ろよ！
例のやつが出てきたぜ！」

オハイ。

オハイ……

うわぁ！

紋章が現れた途端、感じていた苦痛が裏返るような快感へと変わりました...

私達は、お腹へ溜まった精液を噴射しながら初めて味わう絶頂という感覚を噛みしめるのでした...



後から知った事ですが、邪神の呪いは、快楽に溺れ、信仰心が薄れるほど聖女の力が汚れて魔物へ近づき、紋章が増えていく...というものでした。

そしてそれは紋章が増えるたびに、魔族と交わる快感が上がる淫蕩の呪いだったのです...



その後も、彼らは半壊した村で
私達を娼婦のように使い続けました…。



「どうだ？
聖女の姉ちゃん。
魔族と抱き合つて
やりまくるのもいいもんだろ？」

「何を……！
こんな罪深い行い、
背筋が寒くなるだけです……！」

わー

ううう！
ううう！
ううう！

アッ
アッ
アッ

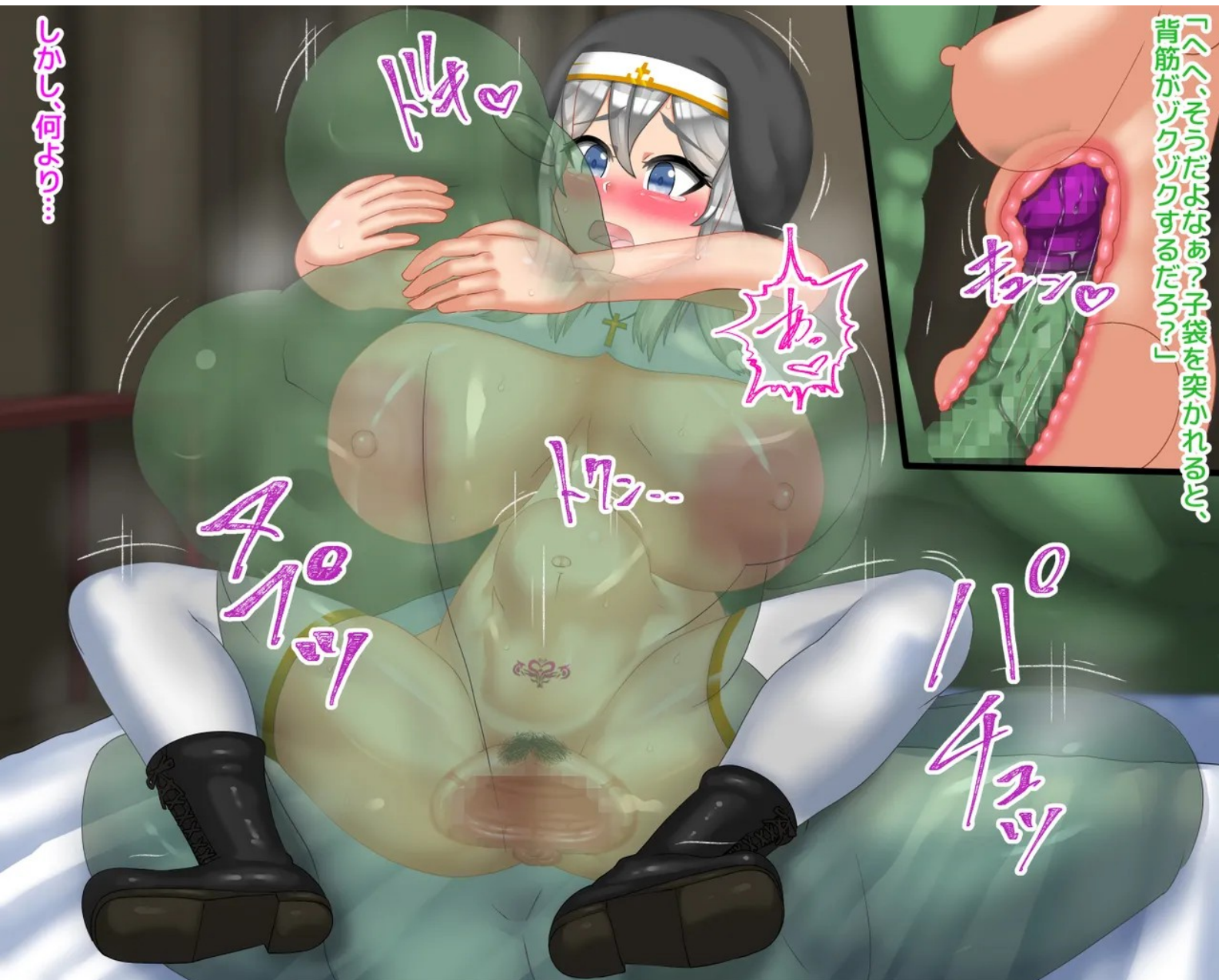
わー

ズ
ズ
ズ

さほど管理は厳しくありませんが、
私達姉妹はお互いを人質として扱われ、
逃げ出すこともできませんでした……。



「へへ、そうだよなあ？子袋を突かれると、
背筋がゾクゾクするだろ？」



...はじめて...

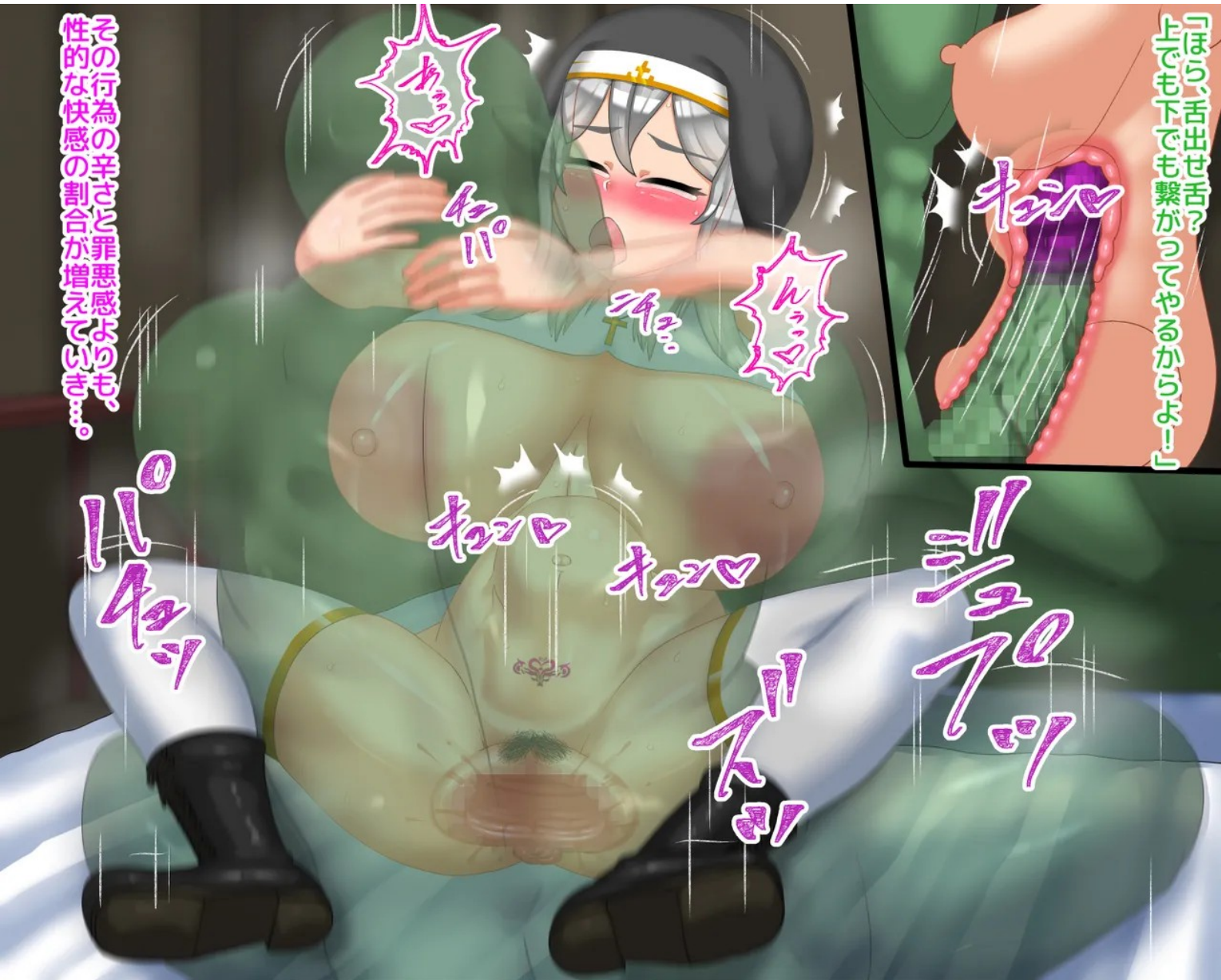
「こんな感じでな? 激しくすると、勝手に声が出ちゃうだ

[illegible]

「ほら、舌出せ舌？」
 上でも下でも繋がってやるからよ！」

オシパ

その行為の辛さと罪悪感よりも、性的な快感の割合が増えていき…。





「へへ、なんだ？
終わっただのにまだ離れねえのか？」

「う…はあ…♡
も、もう、少し…♡
繋がっていてくたさう…♡」

やがてその罪深い行為こそを、
心待ちにするようになっていました…。



「いだあつ！
やめなさいよあつ！
二人同時なんて無理に決まってるでしょつ！」

「はあ？
無理かどうかはこっちで決めんだよう！」

「いっせえっ！！」

ガッ
ボッ

ボ
ッ
ッ
ッ
ッ

ア
ッ
ッ
ッ

あたしは、お姉ちゃんと違って
反抗的だからって
ひどい犯され方をされるようになった…。



「そっすだよ！
だいたい二人じゃなくて三人だぜ？」

「フハハ！
悪い奴だなお前！」

お姉ちゃんは、すっかり人が
変わったようになつて、
いやらしい声をあたりに響かせるようになったわ...



「本気でいくからな！
まだ死ぬんじゃねえぞ！」

もうダメだわ...
一人で意地はうたって
意味なんてない...
それに...

ガッ

んっ!!

おッ
フッ

トッ
ッ

トッ
ッ

げっ!!



ずつと見ないようにしてた
罪深い行為は、退屈で平和な日々より、
遥かに刺激的で……。



「よがれたご褒美だっ！
たっぷり飲みな！」





「お、おねがい♡
もっとのませて♡
わたしの穴つかっていいから♡」
「へっへ、もちろんいいぜ。」
「〇どもは素直が一番だな。」
わたしの人格まで、
上書きしていくみたいだった♡

グハ♡
ドキ♡
ドボ--

村の聖堂には、小さいながらも
女神様の像が残っていて…
私達は、彼女の前で並んで犯されました…♡



「女神様とやらが見てる前で
ま○こ突かれる気分はどうだあ？」

「うっ……♡
そんな事……
言えないっわよあ……！」



「トチッ」

「ガッガッ」

「トチッ」

「お、お願いですっ♡
ここでは……
ゆるしてください……♡」

「オラ」

「オラ」

女神像は光り輝き、アルテリア様の
神々しい力がまだ感じ取れました…。



「今更取り繕う必要ねえだろ？
ここで信仰なんぞ捨てちまえよ！」

「そつだな！
それに呪いが強まれば、もっと気持ち良くなれるんじゃないかねえか？」

「えっ…♡」

「そ、そう…なのですか…♡」

私達は、すでに女神様の畏れ多さよりも
性欲の方が強くなっていました…



「決まってるんだろー！
ほら！ここでちゃんと宣言しな！
女神なんぞ捨てて、
魔神さまの元へ下るってな！」

「え、あ……う……♡」

「わ……わたしは……♡」

「そんな事を……
して……しまつて……良いのでしょうか……」



「言わねえなら今すぐチ○ポ
抜いてやめちまうぞー」

「そっだーさっさと言えー」

「は、はいっ♡
女神様、もうあたし達
あなたの加護なんて
いりませんっ♡」

「ずっと魔神様の元で
おま○こしてたいんですっ♡
だからアルテリア様はもう
必要ないですっ♡」



「そっ、よう♡
だいたい、退屈な修道女なんかより
おま○こしてる方が
ずっと楽しいもん♡」

「わたしたちは
交尾するだけの女に
なりたいたんです♡
聖女なんてやりたく
ありません♡」

ズッ
ズッ

ズッ
ズッ

ビュルッ
ビュルッ
ビュルッ
ビュルッ
ビュルッ
ビュルッ

ド
ド

ド
ド

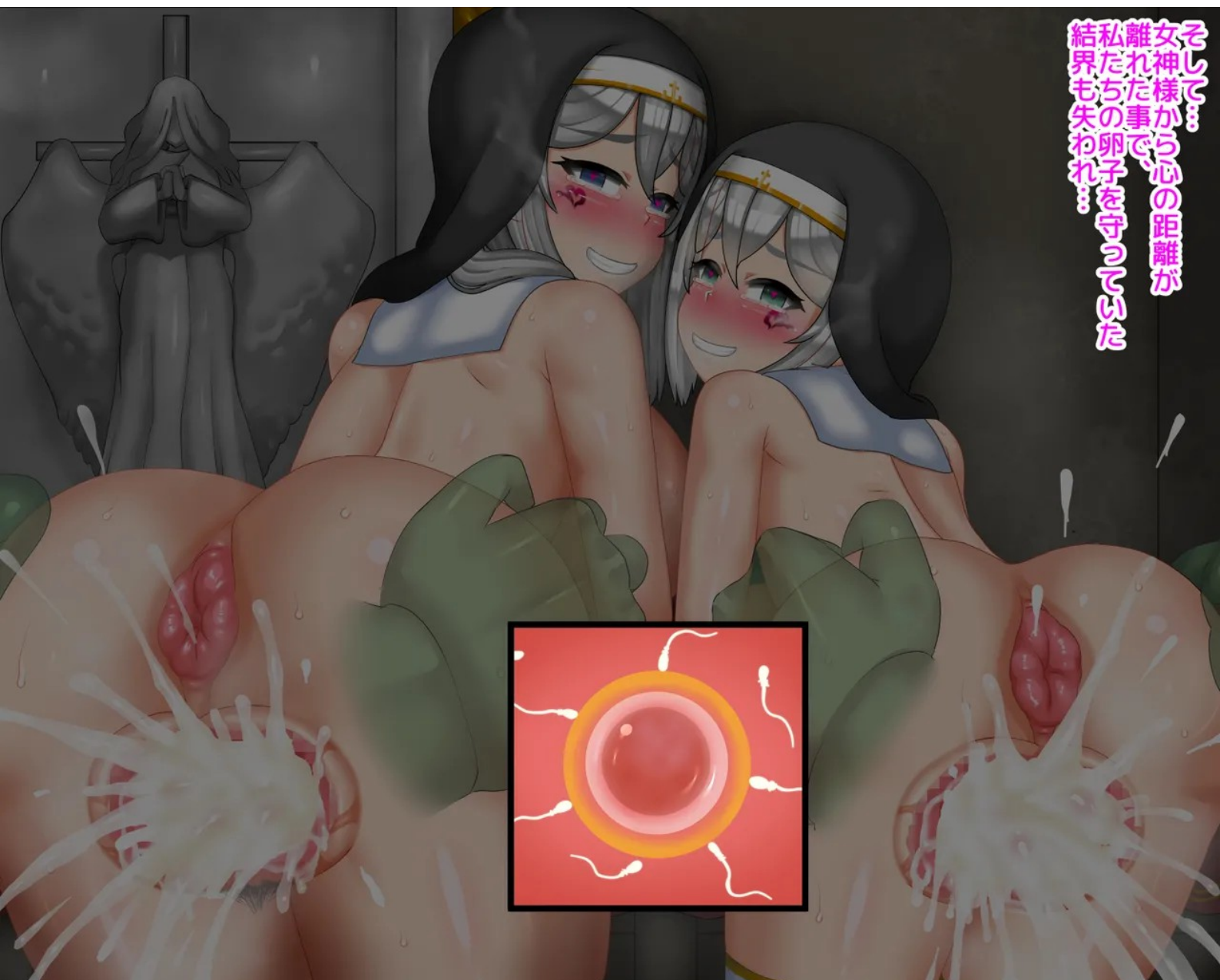
女神像はやがて輝きを失い、私達には新たな紋章と倍化した快感が与えられました...♡

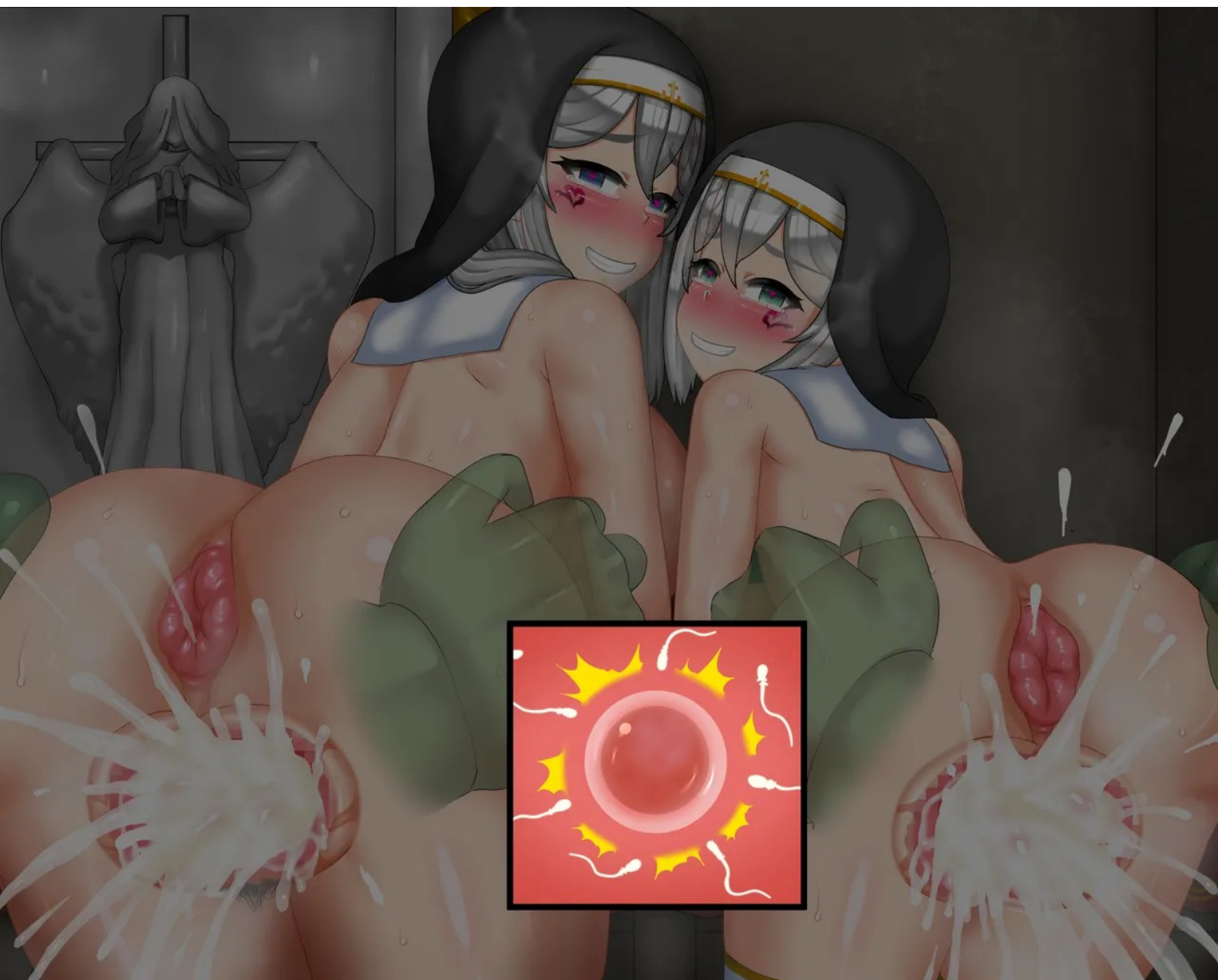
「よくやったな！
もう後戻りできねえぞ！」

かけられたその言葉が嬉しくて、たまりませんでした...♡
もうその時すでに、身も心も魔族になっていたのかも...♡

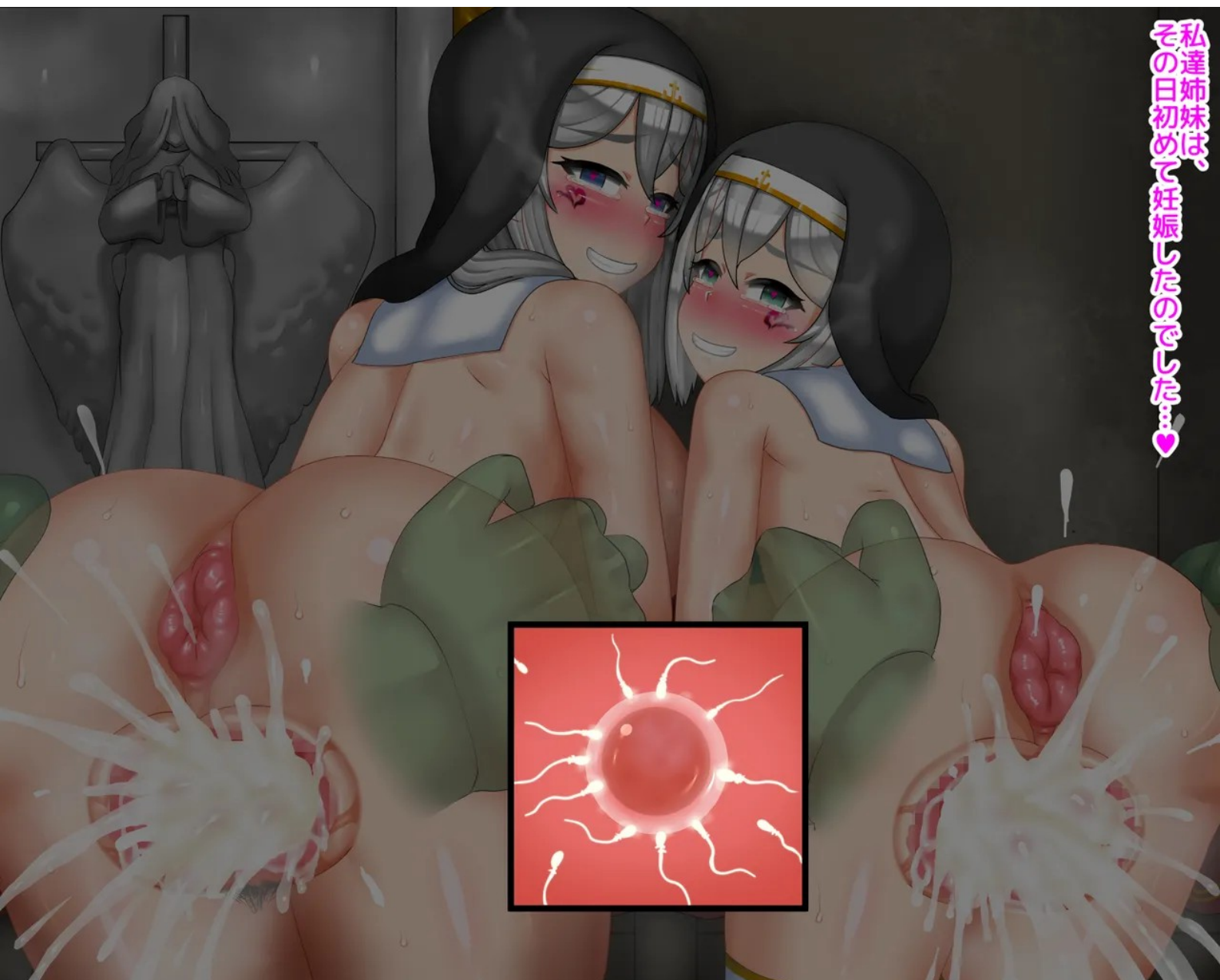


そして、女神様から心の距離が
離れた事で、私達の卵を守っていた
結界も失われ...





私達姉妹は、
その日初めて妊娠したのです…♡



紋章の影響を受けた魔族の胎児は成長が早く、
三ヶ月ほどで姉妹は臨月相当の腹となった。



「ボテ腹見るとチ○ポバキバキになっちゃうぜ...!」

「もう...♡
赤ちゃんがいるのに、
あんまりしすぎたら、
良くないですよ...♡」

「こんなグロマンになるまでやりまくった女がそれ言うかあ?」

「乳首には感度を上げるためのピアスを付けられ、女性器はベテランの娼婦のよう...
その上、お腹まで大きくなった
私たちが姉妹を見たら、
誰もが目を疑うでしょう...♡」

ズリ

ズリ

ウフ...♡

ボテ...

ひら...



「だってえっ♡
交尾するの、
きもちいいんですもの♡」

ドクッ♡

「この前まで処女の
すじマンだったのにな！
このま〇こで聖女は
サギだろ！」

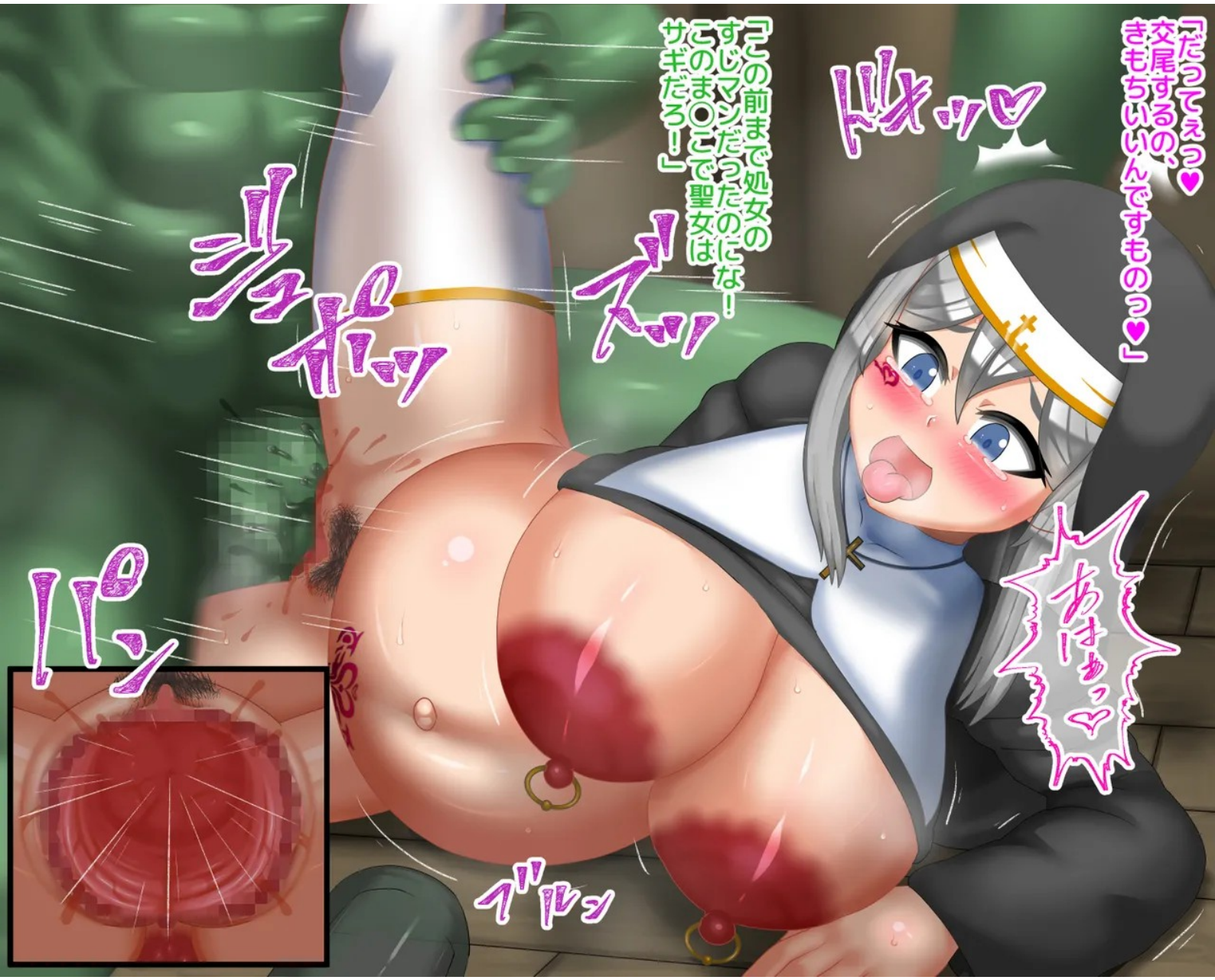
ズッ

シュッ
ガッ

あはっ♡

イッ
ルッ

ハッ



「ひいんっ♡
もいんっ♡
加護も♡
なんだでも♡
すから♡」

女神さまとの繋がりを
なくし、癒やしを失った
私達は、最早名実ともに
聖女とはかけ離れた
存在になつていました…♡

ドッ

ッ

パン

んっ♡



「へっ！
ずいぶん嬉しそうだな！
お前は天性のヤリマンだよー」

そう...
私は、嬉しくてたまらない
のです...♡
聖女の義務から解放され、
たのびたい気持ちでいい事に
溺れたお役目が...♡
今のお役目が...♡



パン

きゃー♡

イロ

パン



「ほらよっ！
妊娠ま〇こに
追加の子種やるぜー」

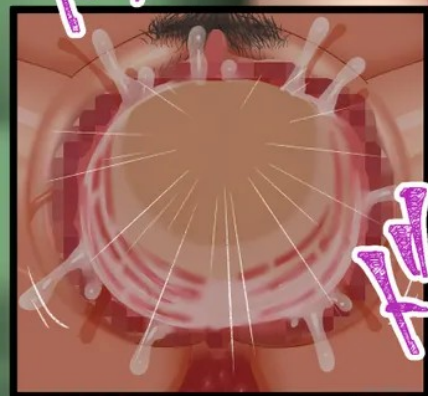
わくっ♡

ドッポッ

わぁぁぁ♡♡♡

ドッ

ドッ



「あー！
すつきりした。」

「一回で、
終わりのんですか……？
もう一回くらい……？
して……いきませんか……♡」

「……こいつは全……」

ドオ♡

ドオ♡

魔神さまは、呪いと
おつしやいました……
私にとつてこの紋が……
まるで祝福のよう……
感じられます……♡

ドオ♡



「へへ、ま○こ
舐めてやるよ。」

「あは♡
使い古しの臭い真っ黒おま○こ、
舐めてくださって
ありがとうございます…♡」

「しかしこいつ、
ずいぶんと
従順になったな。」

「チ○ポ欲しくて
媚び売ってんだろ？
わがつてやれよ。」



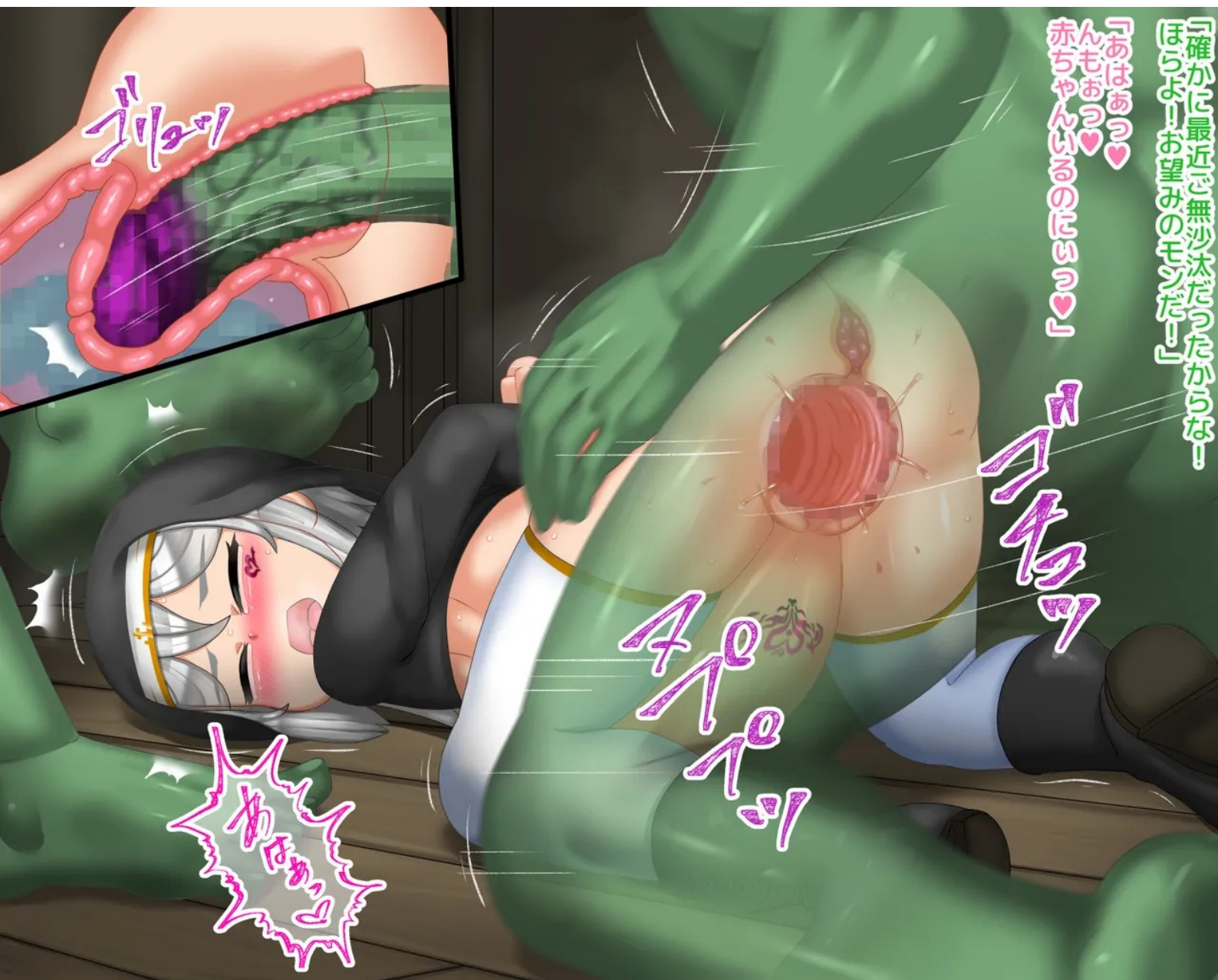
「確かに最近で無沙汰だったからな！
ほらよーお望みのモンだ！」

「あはあっ♡
んもおっ♡
赤ちゃんいるのにいっ♡」

ガッ
ガッ
ガッ

ア
ッ
ッ
ッ
ッ

あはっ
あはっ
あはっ



「中に出してほしいか？
ヤリマンガ○がー」

「うんっ♡出してほしいっ♡
熱いのごぼごぼ溢れるくら
ちようだいっ♡
赤ちゃん溺れちゃうくらっ♡」

！！
ン

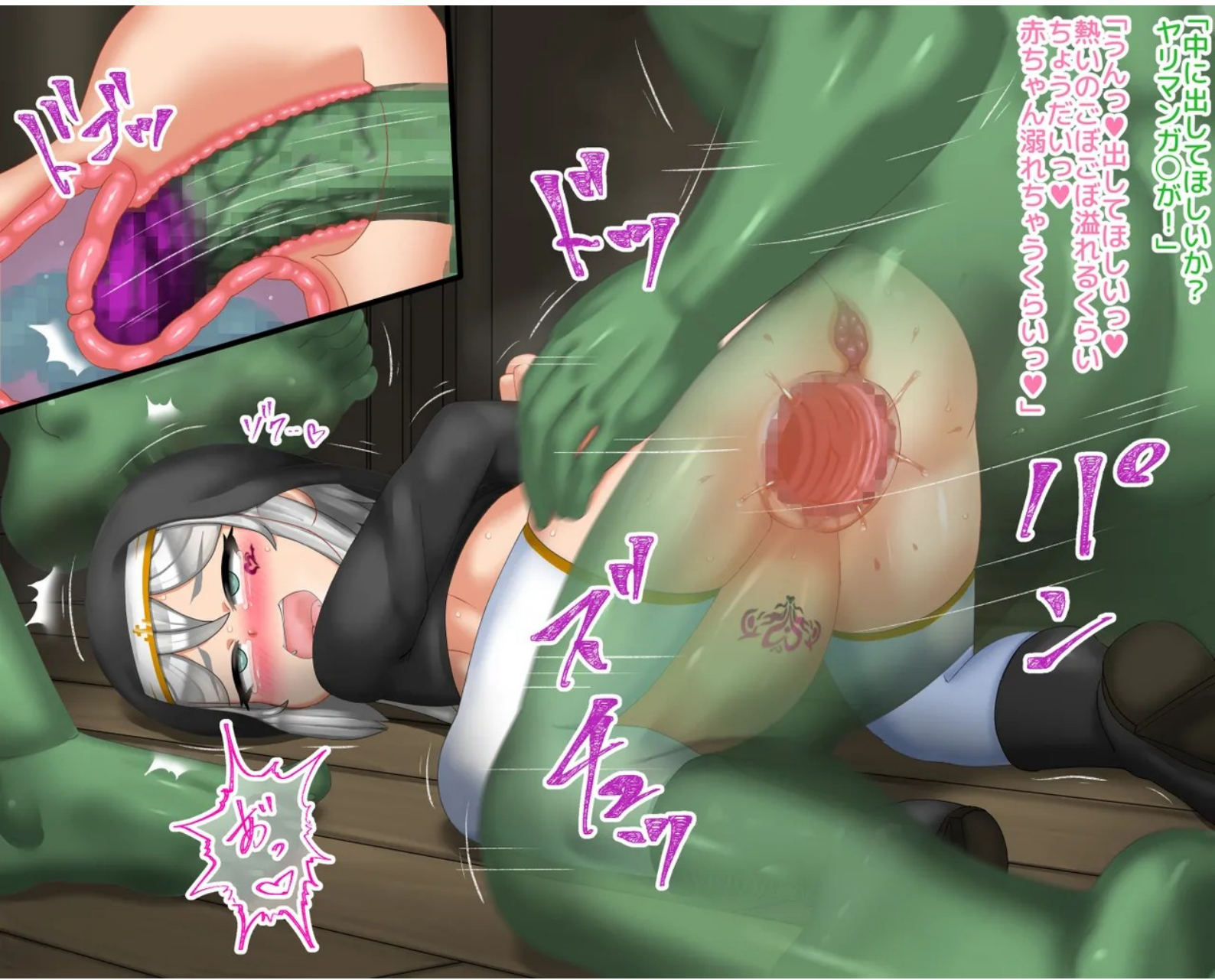
ドッ

ドッ
ドッ
ドッ

ドッ

♡♡

あ、♡



「覚えのいい腹ぺ」ま○こには
ありったけ注いでやるよー」

トビュッ

でも、こんなに気持ちいいんだもの……♡
仕方ないじゃない……♡

こんな最高のお役目をくださった、
魔神さま……♡
ありがとうございます……♡

トッ
トッ
トッ

かんぱん

トイロイロ

ハクッ

ハクッ



「グへへ…
すいぶん舌も
腰使いもこなれてきたな。」

「あなたたちオークに散々
仕込まれましたから…♡」



「教会に弟みたいなのが〇を
残してきたんだろ？そいつに
今のお前を見せたらどう思うだろうな？」

魔族のガ〇を孕んだまま、よがりまくって…。」

「いやあつ♡
いいわないでえっ♡」







「孕みま〇こ締めろっ！中にくれやるー！」



「くく、俺等とやって
ひいひいイッてるようじゃ、
魔神さまの相手なんぞ
できねえぞ? せいせい励んで
鍛えるんだな。」

ああ…♡

私に素晴らしい祝福をくださった
魔神様、早くあなたと繋がりたいです…♡

トキ♡

あら…♡

めちっ

ん…♡
ちゅっ♡

トキ♡

トキ♡
トキ♡



「ああんっ♡
上と下で同時に犯されるの、
だいすきいっ♡」

「無理だのなんだの
めんどくせえ事言ってたガ○が、
ボテ腹になつたら随分
変わったもんだな！」

「ああんっ♡」

「んんん♡」

「ト
ゴ
ッ」

「ズ
ッ
ッ」

「ツ
ッ
ッ」



「元々その気があったから
虚勢張って誘ってたんだろ？
ほらよ！
喉もちゃんと犯してやるよー」



ああ……♡
呼吸できなくて、苦しい……♡
モノみたいに扱われるの、すき……♡

「こいつ、更に変態マツになったな！
息が詰まるのがそんなに
気持ちいいのか！？」

「ああ、こいつはマジモンだな。
これは……」

「ボルガリアさまはこつちの変態ガ○を
選ぶかもしんねえな！」

え、そ、そんな
あ……あたしが……♡♡



お姉ちゃんの後をついていくだけだった、
あたしが...♡

あたしは、よくわからない嬉しさと優越感と
色んな気持ちが混ざって、
いつもよりずっと気持ち良くなっちゃった...♡



おっ--♡

ドクッ
ハッ
ドクッ

クハッ
ハッ
ドクッ
ズッ
ドクッ

ドクッ
ハッ
ドクッ

ハッ
ドクッ
ドクッ

「そおれ！
優秀なま○こガ○に
腹いっぱいご馳走してやらあー」

ッぽっ

びくっ

ッぽッぽッぽッ

ッぽッ

びくっ
びくっ
びくっ





「ごぼ...
ねえ、もう一発...くらい...
して...くれない...くれませんか...
もっと、酷いことされて、
気持ち良くなりたいの...♡」
「くぐぐ、いいぜ？
いくらでもやってやるよー」

「ハッハッ」

「ぼっ...♡」

「くっ♡」

「くっ♡」

「んっ♡」

それは、すでに破水して
出産が秒読みだった時…
あたしたちは、その時も犯されてた…♡

「そうっ！クソ女神に
今のお前たちの事を教えてやんな！」

「は、はい…♡」

あっ♡

んっ♡

「わ、私達は、いま…♡」



ズッ
ッ
ッ

ア
ッ
ッ
ッ

ズッ
ッ
ッ
ッ

ア
ッ
ッ
ッ

「もうオークの赤ちゃん
産まれかけてるのにつ
おま○こっ♡
犯してもらってるのっ♡」

「アルテリア様♡
あなたを選んで聖女は、
今どんなに媚婦よりもっ♡
いやらしいっ♡
魔族の母にっ♡
なろうとしていますっ♡」



「いいぞーそこそこ出そうだなー
きちんと中出しをおねだりしな！」

「はいっ♡
赤ちゃん♡♡出かかっているけど、
子宮いっぱいに精液注いでっ♡♡
それで赤ちゃん追い出してっ♡」

はぁん♡

あうん♡

「子種ほしくて
うずいてうずいてたまりませんっ♡
赤ちゃん♡♡溺れてもいいからっ♡
ありつたけ中に注いでくださいっ♡」



カッポッ

ポッ
ポッ

ズ
リ
ュ
ッ

ポッ
ポッ

「お望み通り
中出しだつ！しっかりと飲んで、
産みやがれ！」



男根を引き抜かれた穴から、
精液が滝のように溢れ出したわ……♡

あ……♡

あ……♡

きつと、精液と羊水が混じって
噴出してたのじゃよう……♡
まるで、私たちも射精しているよう……♡

ブッ
バ
アッ

ブッ
バ
ア



そして、精液を吐き出した子宮は、
最後に赤ちゃんを露出させたの……♡

あひっ♡

ドクン…♡

あひっ♡

ドクン…♡

それは、魔族になった私たちが
今度は母となる、記念すべき瞬間……♡

ポッ

グ
ニャッ

グ
ニャッ

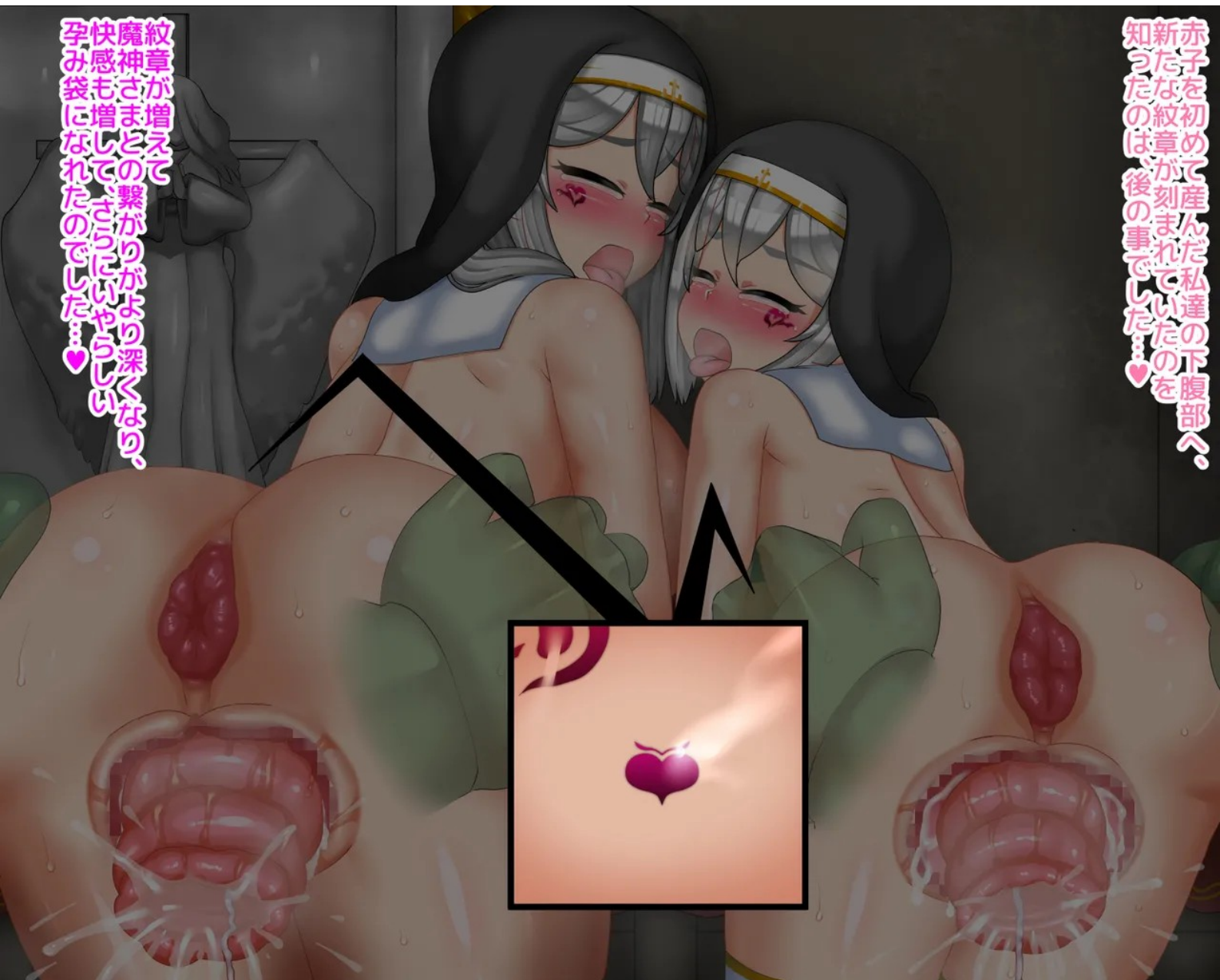
モッ





赤子を初めて産んだ私達の下腹部へ、
新たな紋章が刻まれていたのを
知ったのは、後の事でした...♡

紋章が増え、
魔神さまでの繋がりがより深くなり、
快感も増してさうにやうい
孕み袋になれたのでした...♡



それから、またしばらくして…
もう一度私達が妊娠し、お腹が大きくなった頃…
ボルガルア様のところへ連れてこられました…
そう…どちらかが、この方の伴侶に選ばれるのです…

「どうです？魔神さま。こいつら、なかなか
仕上がってるでしょ？」

「ふむ…そうだな。
どれ…腹を見せてみる…」

「わかりました…♡」



「なるほど...これはいい。それに、清かった信仰の力も
すっかり魔族の淀んだものへすり替わっている。
どこに出しても恥ずかしくない魔族だ...」
これなら、我の分身を産む事も
可能だろう...だが...

「どちらがより、ふさわしいだろうな?」

「ボルガルアさまあ...♥おねえちゃんより
わたし、わたしの方がずっと
マジで信仰心を捨ててますよっ♥」

「いいえっ! 私の方が妹よりずっと
淫乱でおま○こも伸びるから
なんでも受け入れられますっ♥」



はあ...♥

フサ

ドオッ♥

ムフマニ

ドオッ♥

フサ

はあ...♥

「よし、ミルカ。そなたを我の伴侶としよう...。」

「う、うれしい...♡
たくさん、神様の赤ちゃん
産ませていただきますっ♡」

トキッ♡

「ちょ、ちよつと待つてください...！」

私は!?!?
私にも、お情けをください...！」

私は思わず取り乱してしまいます...

そんなん?

ス...

「うむ...エミリア、そなたには
こやつの子を孕んでもらおうか。」



魔神様の後方の林から、天を衝くような大男が現れました…。なんと、暴力的な姿…。それに、ボルガルア様に似た瘴気の香りが漂ってきます…。♡

「我の触手の半分…半身を消費して創り出した眷属のサイクロプスだ。ボルシヤスと名付けた。いわば我の兄弟のようなもの…。そなたはこやつに伴侶となつて子を産み育てるがよい…。」

「うが…これがわ、我の…妻か。気に入った…。」

「ああ…♡ボルシヤス様…♡なんと、たくましく雄々しい…♡謹んで伴侶にならせていただきます…。♡」

「よかったね…♡お姉ちゃん♡」

私たち二人の、新たな生活がこの日から始まりました…。♡

ズン…



私はボルガルア様の伴侶になる準備のため、
棲家である湖へ連れてこられました…♡

「主ではこのオークの赤子を産んでからだ…。
こやつも大事な手下の二人だ。
我が取り出してやるう…。」

「ありがとうございます…♡
ボルガルア様…♡」

ああ…愛する方の手が、
あたしに…♡



「...これがあなたの子宮か。」

〇〇〇でありながら強靱で柔軟...
順調に、魔族へ寄っているな...
だが...」

お腹の中、内臓を弄られるのは
ぞわぞわするような感覚です...



「我の子を宿すには、今少し容量が足らぬか…。」

もう少し、慣らしてやらねばな…。」

「あっ♡
だめ♡
ボルガル様♡
あかちゃん♡
があっ♡」



「そうだ。そろそろ赤子を産ませてやろう。」

子宮口の開きを助けてやれば...」

「あーっ♡♡♡」

「バニャッ
ニャッ
ニャッ」

「ハリッ
ハリッ
ハリッ」

「クワッ...」

私の子宮から、生暖かい羊水が
溢れ出します...♡



「全てを我に委ねよ…」

「あなたはそのまま、快楽を貪るがいい。」



私は言われるがままに、
何の心配もなく赤ちゃんを産みながら
絶頂を迎えました…♡

「……よく悦びのままに産んだ。元気な赤子だ……」

オークども、二人を連れ帰れ。
種付けはまた明日としよう……」

はろー！
やっぱり、赤ちゃん産むの……
気持ちいい……♡

「はっ！わかりました!!
ボルガリア様!!」

